

フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論

— “savoir/pouvoir＋不定詞”と中国語・日本語の可能表現(上) —

A Methodology for a Contrastive Study of Expressions of Possibility in French

: “savoir/pouvoir＋*inf.*” Forms in French and Their Corresponding Expressions of Possibility in Chinese and Japanese(Part 1)

成戸 浩嗣 Koji Naruto

抄 録

フランス語の可能表現の中には、

(1) Il **sait** conduire. (彼は車の運転ができる。) (目黒 2000:250 を一部修正)

のような“savoir＋不定詞”形式をとるものがあり、「習得して身につけた能力によってできる」ことを表わす。中国語にも同じような発想の可能表現があり、

(2) 他**会**开汽车。(彼は車の運転ができる。) (張・佐藤・内田 1997:71)

のような“会V”形式をとるものがそれである。それぞれの言語において使い分けがみられる形式としては“pouvoir＋不定詞”、“能V”があり、

(3) Il **peut** conduire. (彼は車の運転ができる。)

(4) 他**能**开汽车。(同上) (張・佐藤・内田 1997:71)

のような表現が成立する。“savoir＋不定詞”と“pouvoir＋不定詞”の使い分け、“会V”と“能V”の使い分けは、細かな点では相違が存在するものの、系統を異にする言語間に同じような発想の表現形式が存在するという現象からは、個別の言語の枠を越えた、可能表現全般について考えるための重要なヒントが得られそうである。成戸 2018 a、同 2018 b においては、フランス語と中国語の間に発想の似た使い分けがみられる表現形式として使役を表わす“faire/laisser＋不定詞”、“叫／让・N＋V”をとり上げたが、可能形式についても同様のことがあてはまる。

一方、日本語には「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」のような可能形式のほか、いわゆる可能動詞が存在し、フランス語や中国語の可能形式とは異なるレベルで使い分けがなされている。

本稿は、可能を表わすフランス語の“savoir/pouvoir＋不定詞”表現を主たる考察対象とし、対応する中国語の“会／能V”表現、同じく可能を表わす“可以V”表現、日本語の「V(ラ)レル」表現、「(Vスルコト)ガデキル」表現や可能動詞表現との比較を通じて、可能表現について考察を行なうための着眼点、分析方法、予測される結論などを探ることを目的とする。

キーワード

- | | |
|----------|---------------------------|
| 1. 可能表現 | expression of possibility |
| 2. 助動詞 | auxiliary verb |
| 3. 混合形式 | hybrid form |
| 4. 能力 | ability |
| 5. 動作／状況 | action／situation |

目次

- 1 “savoir＋不定詞”とそれに対応する中国語・日本語
 - 1.1 “savoir＋不定詞”と“会V”
 - 1.2 可能と可能性
 - 1.3 “savoir＋不定詞”とそれに対応する日本語
- 2 “savoir／pouvoir＋不定詞”とそれに対応する中国語・日本語
 - 2.1 “savoir＋不定詞”、“pouvoir＋不定詞”の使い分け（以上、本号）
 - 2.2 “savoir／pouvoir＋不定詞”と“会／能V”
 - 2.3 “savoir／pouvoir＋不定詞”、“会／能V”と日本語の可能形式
 - 2.4 可能表現としての普遍性
- 3 おわりに

1 “savoir＋不定詞”とそれに対応する中国語・日本語

1.1 “savoir＋不定詞”と“会V”

「習得して身につけた能力によってできる」ことを表わす“savoir＋不定詞”表現の例としては(1)のほか、さらに以下のようなものが挙げられる。

- (5) **Sais-tu faire la cuisine?**
(君は料理作れるの?)
(『ロベール・クレ仏和辞典』“savoir”の項)
- (6) Ma sœur **sait** jouer du violon.
(私の妹はヴァイオリンが弾けます。)
(『ロワイヤル仏和中辞典』“savoir”の項)
- (7) Il **ne sait pas** se servir de baguettes.
(彼はおはしが使えない。)(木村 2016:19)
- (8) **Savez-vous** parler anglais?
(あなたは英語が話せますか?)
(『ロベール・クレ仏和辞典』“savoir”の項を一部修正)
- (9) Cet enfant **ne sait pas** encore lire.
(この子はまだ本が読めない。)
(目黒 2000:250)
- (10) Dessine-moi un mouton.
— Mais je **ne sais pas** dessiner!

(羊の絵を描いて。 — 僕は絵は描けないんだよ。)(21世紀:749)

(11) **Savez-vous nager?**

(あなたは泳ぐことができますか。)
(『新フランス文法事典』“savoir”の項を一部修正)

(12) **Savez-vous jouer au tennis?**

(あなたはテニスがお出来になりますか。)
(『フランス文法大全』:316)

これらはいずれも「知識や技術を習得して身につけた能力によってできる(できない)」を表わしている。また、具体的な知識や技術が明示されていない

- (13) Il **ne sait pas** encore penser par soi-même.
(彼はまだ自分で考えられない。)
(木村 2016:55)

- (14) Elle **sait** tout faire!
(彼女は何でもできるな!)
(『ロベール・クレ仏和辞典』“savoir”の項)

のようなケースも、「習得の結果」としてできるか否かを問題としている点においては(1)および(5)～(12)と同様であると考えられる。

“savoir＋不定詞”と同様に、中国語の“会V”も

「習得して身につけた能力によってできる」ことを表わすのに用いられる形式であり、以下のような例がみられる。

(15) 你会骑自行车吗? — 会骑。

(あなたは自転車に乗れますか。 — 乗れます。)

(藤堂・相原 1985:124) ※日本語訳は筆者

(16) 我会做中国菜, 不会做日本菜。

(私は中華料理は作れますが、日本料理はできません。)(郭春貴 2001:33)

(17) 他不但会作词, 也会谱曲。

(彼は作詞がやれるばかりでなく、作曲もできる。)

(《现代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“会”の項)

(18) 他在中国留学了两年, 所以会说汉语。

(彼は中国に2年間留学したので、中国語が話せます。)(郭春貴 2001:33)

(19) 这个同志会跳舞。

(この方はダンスができる。)

(『中国語教科書 上巻』:197)

※日本語訳は筆者

(20) 我根本不会踢足球。

(私はまったくサッカーができない。)

(《现代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“会”の項)

“savoir”の語彙的意味は「知っている」であり、“savoir+不定詞”の働きについては、辞書などにおいて「…することができる」、「…する術(すべ)を心得ている」のように示されるのが通例である。一方、“会”の語彙的意味は、大河内1997:137の“会”は本来、会得を意味する動詞である」や、《漢日辞典(“会²”の項)》の「(理解、懂得)理解する、わかる」という記述にみられるように「知っている」に近いものであり、“会V”の働きについては、藤堂・相原1985:124に「(学習や練習または習慣によって)会得してできる」のような説明がなされていることから“savoir+不定詞”との相似点がみてとれる¹⁾。また、“会V”表現の中には、郭春貴2001:34が「生まれつき、あるいは自然にできること」を表わす例として挙げている

(21) 青蛙会跳, 不会飞。

(蛙は跳ぶことはできるが、飛ぶことはできない。)(郭春貴 2001:34)

(22) 人会使用工具, 可是一般动物不会。

(人間は道具を使えるが、ふつうの動物はできない。)(同上)

のようなケースがみられる。これらは「先天的に備わった能力」によるものである点で、習得して身につけた能力すなわち「後天的に身につけた能力」によるものとは異なる²⁾。“savoir+不定詞”の働きについては、「生まれつきの才能(や習得した能力)」によってできるかどうかが問題となるとする『クラウン仏和辞典(“pouvoir”の項)』のような記述がみられるものの、これに該当する表現例は挙げられていない。この点については、「普遍的(一般的)真理」や「事物の性質」を表わす動詞の現在形とも比較して“savoir+不定詞”の働きを確認しておく必要があると考えられる。さらに、目黒 2000:250 は同形式の働きの一つとして「才能・素質(…するすべを心得ている、…するのがうまい)」を示し、

(23) Il **sait** se tirer d'affaire.

(彼は窮地を切り抜けるのがうまい。)

(目黒 2000:250)

(24) Il **sait** parler aux enfants.

(彼は子供に対する話し方を心得ている。)

(同上)

を挙げているが、これらは後天的に身につけた能力を問題としているとみられるため、“savoir+不定詞”が“会V”と同様に「先天的に備わった能力」によってできることを表わすか否かについては慎重な検討が必要である。

ところで“savoir”は、例えば

(25) Il **sait** le portugais [quatre langues] .

(彼はポルトガル語[4か国語]ができる。)

(『ディコ仏和辞典』“savoir”の項)

のように“savoir+名詞”形式をとり、中国語の“会”が

(26) 她会西班牙语。

(彼女はスペイン語ができます。)

(船田 2003:103)

のように“会+名詞”形式をとる現象と共通している³⁾。この場合の“savoir”は“savoir+不定詞”形式の場合とは異なって、「知っている」という語彙的意味を表わす動詞であるとされるが、『ディコ仏和辞典(“savoir”の項)』、『ロワイヤル仏和中辞典(“savoir”の項)』にそれぞれ「(学習・訓練によって)知っている、習得している、暗記している」、「(学習・訓練によって)知っている、覚え込んでいる、体得している」と記されていることからみても、可能の意味に解される余地がある。このことは、“savoir que+直説法”形式をとる

- (27) Je **sais que** tu ne m'aimes pas.
(君が私を好きでないことは分かっている。)
(『プログレッシブ仏和辞典』“savoir”の項)

や、“savoir+間接疑問節”形式をとる

- (28) Je ne **savais que** faire.
(私は何をしたいかわからなかった。)
(木村 2016:45)

あるいは中性代名詞をとる

- (29) Ça, par exemple, je ne **le savais pas** !
(それは知らなかったなあ!)
(NHK2003年7月:40-41)

のような、“savoir”が明らかに「知っている」を表わすケースと比較すれば理解しやすい。

一方、(26)のような“会+名詞”表現においては“会”は動詞とされる(但し一般の動詞とは異なる特徴をもつ)ものの、「会得する」ではなく「できる」という可能の意味を表わす。このことは、例えば『漢日事典(“会”の項)』が、「(熟悉、通曉)できる通曉する」について“会日语(日本語ができる)”、“会游泳(泳ぎができる)”という可能の例を挙げる一方で、「(理解、懂得)理解する わかる」については“心領神会(深く理解する)”という成語の例を挙げるにとどまっていることや、『中日大辞典(“会”の項)』も同様に「会得する、悟る、わかる」という意味項目を示しながらも“只可意会、不可言传(ただ心に了得し得るだけで言葉では伝え得ない)”のような常套句の例を挙げるにとどまっていることとも矛盾せず、

可能、非可能の双方をカバーする働きを有する“savoir”とはこの点で異なると考えられる。ちなみに、現代中国語において「会得する、理解する、わかる」のような語彙的意味を明示するには“会”単独ではなく、“会得”、“领会”、“学会”、“体会”、“误会”のような二音節語の形をとらなければならず、この点からみても、“会”の可能を表わす成分としての性格の強さがうかがわれよう。

“savoir+名詞”、“会+名詞”を比較すると、“savoir”の語彙的意味を表わす働きは“会”のそれよりも強いこととなるため、可能を表わす“savoir+名詞”表現に用いられる名詞の種類も限定されると推察される。このことは、『東京外国語大学言語モジュール savoir と connaître の現在形』が“savoir”の働きについて、「人や具体的な名詞が目的語になることはふつうありません」としていることから予測されるが、この予測が正しいかどうかについては、具体的な表現例についての詳細な分析を待たなければならない。

“savoir+不定詞”表現における“savoir”は、同じく不定詞と組み合わされて可能を表わす“pouvoir”、義務を表わす“devoir”、願望を表わす“vouloir”などととともに「助動詞」、「副次的助動詞」、「準助動詞(or 半助動詞)」、「助動詞的な働きをする動詞」などとよばれている。このような用語のばらつきがみられるのは、助動詞の“avoir”、“être”がそれぞれ「もっている」、「ある・いる／である」という語彙的意味を失って純然たる機能語として働くケースとは異なり、語彙的意味をとどめていることによる⁴⁾。このことは、例えば

- (30) Il **sait** piloter un avion mais il **ne sait pas** faire marcher la machine à laver.
— Quelle affaire !
／彼は飛行機の操縦が**デキル**けど、洗濯機の使い方を**知ラナイ**の。
— 何ということだ。(21世紀:749)

のような対応例に端的にあらわれている⁵⁾。

ちなみに、“savoir”の類義語である“connaître(知っている)”、“comprendre(わかる)”には、可能を表わす助動詞的な働きはみられない。久松 1999:42 に、“savoir”は「(情報・事実等を)知っている」の意味で用いられるのに対し、「(人名・地名を)知っている」の意味では“connaître”が用いられ、「(相手の質問

そのものが)わからない」という場合には“comprendre”が用いられる旨の記述がみられることや、『プログレッシブ仏和辞典(“savoir”の項)』が、“savoir”は“apprendre(習い覚える)”に対応するのに対し、“connaître”は“étudier(研究する)”に対応するとしていることから、“savoir”が“connaître”、“comprendre”に比べて「知識や技術の習得」との関わりが深いことがみてとれる⁶⁾。

ところで、“savoir”、“pouvoir”、“devoir”、“vouloir”などは、六鹿 2016:246 が「準助動詞はそれぞれ固有の意味を持っており」、「どこまでを準助動詞として考えるかは、はっきり決まっているわけではありません」としているように、“avoir”、“être”に比べれば動詞としての性格を強くとどめているものの、準助動詞を相互に比較すれば動詞的性格の強弱に差異が存在するようである(これらの点については佐藤 1992 に詳細な記述がみられる)。例えば、“savoir”は上記のように“connaître”や“comprendre”と同様に動詞として働く一方、“pouvoir”をはじめとする準助動詞の一つに位置づけられる働きをするのであるが、“pouvoir”は“savoir”とは異なって具体的な動作の概念を表わすことはなく、可能を表わす働きに特化した成分である。このことは、例えば

- (31) Venez quand vous **pourrez**.
(来られる時に来てください。)
(『ロワイヤル仏和中辞典』“pouvoir”の項)
- (32) Répondez, si vous le **pouvez**.
(答えられるなら答えてごらんなさい。)
(同上)
- (33) Il **peut** ce qu'il veut.
(彼はしたいことができる。)(同上)

のような、“pouvoir”が不定詞をとみなわない表現においても「できる」を表わすケースによって理解できよう。『ロワイヤル仏和中辞典(“pouvoir”の項)』によれば、(31)は既出の不定詞を反復しないケース、(32)は中性代名詞 *le* とともに用いられるケース(“*le*”は“répondre”)、(33)の“pouvoir”は“pouvoir faire”の意味で用いられるケースであり、いずれも文脈からどのような動作であるかを特定することが容易であるため動詞が省略された形であって⁷⁾、“pouvoir”が動詞として可能を表わしているわけではない。(31)～(33)のいずれにおいても“pouvoir”

は具体的な動作の意味を含んでおらず、この点において“savoir”よりも可能を表わす助動詞としての性格が強い(機能語化の度合いが高い)といえることができる。これとは反対に“savoir”は、“savoir+不定詞”形式においても具体的な動作の意味をとどめている。このため同形式は“pouvoir+不定詞”の場合に比べ、可能形式としての完成度が相対的に低いこととなる。このことは、川本 2007:53-54 が、不定詞と結びつく“pouvoir”は“falloir”、“devoir”とともに助動詞として取扱われうるのに対し、“savoir”は“vouloir”とともに「時には助動詞のうちに入れることができる」としていることとも符合する。成戸 2018a:45 においては、「放任」を表わす“laisser+不定詞”表現を、「使役」を表わす“faire+不定詞”表現と感覚動詞を用いた表現との間に位置づける考え方、すなわち同形式をとる表現を語彙項目から文法形式に移行する中間段階の「混合形式(hybrid form)」と位置づける考え方について述べた。このような発想は、“savoir+不定詞”表現の分析においても応用可能であると考えられる。つまり、可能を表わす“savoir+不定詞”を、“savoir”が「知っている」という語彙の意味をもって動詞表現を構成する場合に比べれば文法形式としての性格が強いものの、“pouvoir+不定詞”に比べればその性格が弱いことから、語彙的意味をとどめつつも文法形式への移行が進んだ「混合形式」と位置づけるのである。

“savoir”の場合とは異なる形ではあるが、中国語の“会”にも動詞の用法、助動詞の用法が存在する。後者の用法で用いられる場合、可能を表わす“能”、“可以”や願望を表わす“要”、“得”などとともに「能願動詞」ともよばれるが⁸⁾、この点では“savoir”をはじめとする前掲のフランス語助動詞が「副次的／準(半)助動詞」、「助動詞的な働きをする動詞」などとよばれる状況と似ている。前述したように、“会”が助動詞として働く場合には、“savoir”と似た発想から可能を表わす働きを備えるにいたっており、このことは《現代汉语八百词(“会”の項)》に「懂得怎样做或有能力做某事」と示されていることからみとれる。一方、“会”が動詞として働くのは、(26)や

- (34) 你会什么?(君は何ができますか。)
(《現代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“会”の項)

(35) 你会哪种外国文? — 我只会汉语。

(あなたはどんな外国語ができますか?

— 中国語だけです。)

(大河内 1997:137)

のように名詞が後続する場合である⁹⁾。前述したように、このような場合における“会”は、助動詞として働く場合と同様に「可能」を表わすのであり、この点では「できる」とともに「知っている」という非可能の意味をも表わす“savoir”とは異なる。可能を表わすことに特化された成分である点で、“会”は“pouvoir”と共通する一方、“pouvoir”には“pouvoir+名詞”形式で可能を表わす用法はみられない。

1.2 可能と可能性

“会V”には推測・推量を表わす働きがあり、例えば

(36) 她听了一定会生气的。

／彼女が聞いたらきつとおこるよ(=おこる
ダロウ／ニ違イナイ)。

(荒川 1986:5 を一部修正)

(37) 他会来帮助你。

／かれが手伝いにくるダロウ。

(大河内 1997:136)

(38) 现在他不会在家里。

／いま彼は家にいるハズガナイ。

(《現代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』
“会”の項)

(39) 他会不会去? — 会。

／彼は行くダロウカ。 — 行くハズダ。

(同上)

のような例が挙げられる。大河内 1997:137、138 が「“会”の助動詞としての可能は推量に通じている」、「『ありえない→ないだろう』のように、確信のある推測は可能と意味の外延が接するのである」として、いることからみてとれるように、可能と推測・推量との間には連続性が存在すると考えられる¹⁰⁾。このことを端的に表わすのが「可能性」という概念である。“会V”の上記の働きについては辞書や参考書において「可能性」という用語を用いて説明されることが多く、同形式の発展的用法であると考えられる。推測・推量を表わす働きが“会V”の本来的用法で

ないことは、藤堂・相原 1985:122 に、

(40) 今天下午 {会/要} 下雨。(今日は午後雨
が降るだろう/降りそうだ。)

(藤堂・相原 1985:122 を一部修正)

のような表現は

(41) 今天下午下雨。(今日は午後雨降る。)

(同上)

という命題をそのまま断言せずに陳述を少しゆるめ、話し手の推測の気分を入れた表現、すなわち「命題内容についての話し手の推測や確信の度合い」を表わす「陳述緩和用法(Epistemic sense)」であり、語本来の意味に起因する「原義用法(Root sense)」とは異なる旨の記述がみられることによっても理解できよう¹¹⁾。

一方、フランス語においては、推測・推量を表わす働きは“savoir+不定詞”ではなく“pouvoir+不定詞”によってになわれ、以下のような日本語表現との対応例がみられる¹²⁾。

(42) Cet enfant **pouvait** avoir dix ans.

／その子は10歳くらいダッタロウ。

(『クラウン仏和辞典』“pouvoir”の項)

(43) Cela [Ça] **ne peut (pas)** être vrai.

／それが本当であるハズガナイ。

(久松 2002:71)

(44) Ce tableau **ne peut** être authentique.

／この絵が本物であるワケガナイ(=ハズ
ガナイ)。

(『ディコ仏和辞典』“pouvoir”の項を一部
修正)

(45) Je **peux** me tromper.

／私が間違っているのカモ知レナイ。(同上)

(36)~(39)、(42)~(45)において“会”、“pouvoir”に対応する日本語成分は、「~ダロウ」、「~ハズダ」、「~カモ知レナイ」などいくつかの形式に分かれており、(39)にいたっては“会”に対して「~ダロウ」、「~ハズダ」の二者が対応している。これらの対応例をみる限りでは、“会”、“pouvoir”の表わす推測・推量の方が日本語諸形式のそれに比べ、コトガラ成立に対して話し手が認めている確実性の度合いの幅

がより広いということとなる。上記の日本語形式のうち、「～ハズダ」と「～カモ知レナイ」では確実性の度合いが大きく異なるが、フランス語ではいずれも“pouvoir”によって表わされている。同様に、「～ダロウ」と「～ハズダ」、「～ニ違イナイ」の間にも確実性の度合いの差異が存在するが、いずれも“会”に対応している¹³⁾。また、(45)においては“pouvoir”、「～カモ知レナイ」の対応がみられるが、“会”の場合はどうであろうか。『岩波日中辞典(「-かもしれない」の項)』、《中文版 日本語句型辞典(「かもしれない」の項)》には「或許」、「也许」、「可能」、「说不定」などが挙げられる一方、“会”はみあたらない。仮に「～カモ知レナイ」と“会”の対応関係が成立しない、あるいは成立しにくいのであれば、そこには確実性の度合いにおける“pouvoir”、“会”の差異が見いだされることとなる。推測・推量を表わす“会”、“pouvoir”の働きを比較する場合にはこのほか、“会”、“pouvoir”よりも確実性の度合いが高い推測・推量を表わす“要”、“devoir”なども比較の対象に加えて作業を行なうことが求められよう。辞書などにおける“pouvoir”についての推測・推量の項目には「…(する)かも知れない、…の可能性がある(する可能性がある)、…でありうる」のように示されており、中には『ロベール・クレ仏和辞典(“pouvoir”の項)』のように「…するかもしれない」とのみ示しているものもあるため、“devoir”の「…に違いない、…のはずである」などに比べると確実性が低いことは明白である。このことは、『フランス文法事典(“devoir”、“pouvoir”の項)』に、“devoir+不定詞”の働きについては「推測・可能」、「断定の緩和」のように示されているのに対し、“pouvoir+不定詞”のそれについては「不確実」のように示されていることにもあらわれている。同様のことは中国語の“会”、“要”、さらには“能”、“(应)该”などについてもあてはまる¹⁴⁾。これらのうち、“能”は可能を表わす働きにおいても“会”との使い分けが問題となる成分であるが、推測・推量を表わす働きについては、例えば《漢日辞典(“能”の項)》に、「(可能)あり得る、はず、…することができる」のように示されている。推測・推量を表わす場合における“会”、“能”については、《現代汉语词典(“能”の項)》、奥水 1985:166、讀井 1996:57、相原 1991:33、同 1997:34-38、勝川 2011b:174 などにおいて、“对于尚未实现的自然现象的推测, 用‘能(够)’、不用‘可(以)’”、“‘能’は多く口語で用いられる”、“‘能’はふつう疑問文に

あらわれる”、“‘能’は北方口語で好んで用いられ”、“‘会’は南方口語でよく使われる”、『可能性・蓋然性』を表わす用法において、『マイナスイメージの事が起こりうる』と判断・推測される場合には一律に“会”が用いられる”、“望ましくない事態に対する予測や推測には通常“会”が、望ましい事態の実現を見込む場合には“能”が用いられる傾向がある」などの指摘がなされており、両者の相違にはいくつか異なる側面のあることがうかがわれる。上記の指摘以外に使い分けの要因が存在する可能性も考えられよう。具体的な個別の表現例においては、それらの相違のいずれかが主たる要因となって“会”あるいは“能”が選択され、さらには話の場(or 文脈)によっても影響を受けると推察される¹⁵⁾。推測・推量を表わす“会”、“能”の使い分けのうち、フランス語の“pouvoir”、“devoir”の使い分けと比較することが可能なもの、比較する意味があるものを特定し、確実性の度合いの差異とともにとり上げることが重要である。推測・推量を表わすフランス語、中国語、日本語の諸成分の対応関係について詳細な検討を重ねていくことにより、コトガラ成立に対して話者がどの程度の確実性を認めているかによる各成分の使い分けについての厳密な記述が可能となるはずである。但し、寺村 1982:269-270 も指摘しているように、日本語の可能態は、文語的な文脈に用いられる「得る」を除けば「～する可能性がある」の意味では用いられないため、推測・推量を表わす働きについての考察に日本語可能表現を加えることはできない。本稿は可能を表わす働きを主たる考察対象としているため、推測・推量を表わす“会”、“pouvoir”の働きについてこれ以上はふれないが、「可能→可能性→推測・推量」のような意味の変遷について考えることは、可能表現の全貌をとらえるために不可欠の作業である¹⁶⁾。

1.3 “savoir+不定詞”とそれに対応する日本語

1.1 で述べたように、“savoir+不定詞”、“会V”は、習得して身につけた能力によってできることを表わすが、このような働きに特化した形式は日本語にはない。「V(ラ)レル」の場合、森田 1989:1215 の記述にみられるように、「習得した能力によってそれを行うことが可能である」は同形式が表わす可能の一部である。この点は「(Vスルコト)ガデキル」の場合も同様であり、寺村 1982:256 が「スルはシウル」という文語体の形はあるが、口語ではデキルがその

可能形と見るべきであろう。これは形態的にはつながりが無いから、語彙的な対応である」としていることから、動作の種類にかかわらず用いられる「スル」の場合と同様に、「デキル」も可能の種類にかかわらず用いられることがみてとれる¹⁷⁾。

1.1 では、“savoir”が動詞としての語彙的意味をとどめつつ可能形式“savoir+不定詞”を構成することをみてきた。日本語には動詞がそのままの形で語彙的意味を保ちながら可能のマーカーとしても働くという現象はみられない反面、例えば「読む」、「書く」に対する「読メル」、「書ケル」など、動詞の語彙的意味と可能を表わす働きが一体化したいわゆる「可能動詞」が存在する。可能動詞は「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」のような可能形式とは異なって語彙的手段による可能表現の方法であり、その内部構造において「-eru」の部分が可能を表わす。可能形式においては動作と可能が別個の事象として表わされるのに対し、可能動詞においては両者が一体化した一つの事象として表わされる¹⁸⁾。可能形式と可能動詞の間にみられるこのような相違は、成戸 2016:29-31、成戸 2018a:30-35 でとり上げた使役形と「複他動詞」の相違、すなわち使役的事象と被使役的事象を別個のものとしてとらえるか一体化したものとしてとらえるかという相違に通じるものがある。一方、フランス語の“savoir+不定詞”においては、“savoir”の可能を表わす働きと不定詞(動詞)の語彙的意味との間には一体性がみられない。このため、日本語の可能動詞と比較した場合には、“savoir+不定詞”の文法形式としての側面が際立つこととなるのである。

ところで、「見レル」、「食べレル」、「着レル」、「起きレル」、「出レル」、「来レル」などの「ラ抜き言葉」は、可能形式から可能動詞への発展的变化であるとみることができる。このことは、鈴木 2015:102-104 に、可能・受け身・自発・尊敬の意味を表わす働きをする「V(ラ)レル」とは異なって「ラ抜き言葉」が可能の意味に限定して用いられる旨の記述がみられることや、岩淵 1972:154 が「見レル」、「起きレル」のように上一段動詞などに「レル」が付いて可能を表わすものを「一種の可能動詞」とし、「四段動詞における可能動詞の隆盛による影響の結果生じたものでしょう」としていることからみとれる。「ラ抜き言葉」は、鈴木も言うように、多義性を有する「V(ラ)レル」からくる意味的な曖昧さを避けるための変化であり、文法形式が動詞の中に埋没して

しまった結果であるとみることもできよう¹⁹⁾。「V(ラ)レル」から可能動詞への変化の方向は文法形式から語彙項目への変化であるということができ、1.1 でとり上げた“savoir+不定詞”の場合とは反対方向の変化である。

2 “savoir/pouvoir+不定詞”とそれに対応する中国語・日本語

2.1 “savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”の使い分け

1.1 で紹介したように、“savoir+不定詞”は習得して身につけた能力によってできることを表わすが、このことはすなわち、「主体に備わった能力によってできる」を意味するということである。これに対し“pouvoir+不定詞”は、「ある事情(or 条件)のもとでできる」、すなわち「主体とは切り離された外的状況のもとでできる」ことを表わすとされる。しかしながら、“pouvoir+不定詞”の働きについての説明にも「能力」という用語がしばしば使用されるため、“savoir+不定詞”との相違をみていく際には注意が必要である²⁰⁾。例えば、『プログレッシブ仏和辞典(“pouvoir”の項)』や『ロワイヤル仏和中辞典(“pouvoir”の項)』、『新フランス文法事典(“pouvoir”の項)』は“pouvoir”が表わす意味の一つとして「能力、可能」という項目をもうけているが、これでは“savoir”の働きと混同しかねない。一方、佐藤・山田 2011:80 は

(46) Je ne sais pas nager. (私は泳げない)
(佐藤・山田 2011:80)

(46)' Je ne peux pas nager. (私は泳げない)
(同上)

を挙げ、“savoir+不定詞”は「能力」として何かをできたり、できなかったりする場合に、“pouvoir+不定詞”は「事情」で何かをできたり、できなかったりする場合にそれぞれ用いられるとしており、“savoir”の働きについて「能力」という言葉を用いている。「能力」と「可能」をめぐる両形式の相違について簡潔に述べているのが『東京外国語大学言語モジュール pouvoir と savoir の違い』であり、「savoir は潜在的な能力を表しますが、pouvoir はその能力がある状況下で発揮されるかどうかを意味し

ます」としている。つまり、“pouvoir”は“savoir”とは異なって「能力を発揮することが可能な状況にあるかどうか」を問題とするわけであり、主体に備わった能力そのものを問題とするわけではないのである。これを別の角度からみれば、“savoir”は恒常的な状態を、“pouvoir”は一時的な状態を表わすということとなる。これらのことは、小熊 2013:78-79 に、“savoir+不定詞”表現は主体の能力を表わし時空間限定を受けないのに対し、“pouvoir+不定詞”表現は様々な外的要因に依存するため時間軸が想定される旨の記述がみられることによっても理解できよう²¹⁾。“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”のこのような相違は、(46)と(46)’を比較した場合、(46)は「金づちだから泳げない」という意味に解されるのに対し、(46)’は「泳ぎはできるが、時間がない(権利がない、水着を持っていない、体調が悪い…etc.)」など他の事情で泳げないという意味に解されるという形であらわれる。同様に、『新フランス文法事典(“savoir”の項)』は、

- (47) Je **ne sais pas** lire. (私は字が読めない)
 (『新フランス文法事典』“savoir”の項を一部修正)
 (47)’ Je **ne peux pas** lire. (私は字が読めない)
 (同上)

を比較した場合、(47)は「文字を知らないため(or 無学で)字が読めない」ことを、(47)’は例えば「暗くて字が読めない」ことを表わすとしている。(1)、(3)の場合も、(1)は「運転技術を知っているからできる」ことを表わす表現であるのに対し、(3)は、例えば「免許証を携帯しているから運転できる」のような客観的事実を前提とした表現である。両形式のこのような相違は、両者が共起する

- (48) Vous **savez** téléphoner à l’étranger ?
 — Oui mais je **ne peux pas** avec mon portable.
 (外国に電話できますか？ — はい、でも私の携帯ではできません。)
 (東京外国語大学言語モジュール pouvoir と savoir の違い)

のような表現において鮮明にあらわれている。

1.1 で述べたように、“savoir+不定詞”における

“savoir”は「知っている」という語彙的意味をとどめているため、例えば

- (49) Je **ne sais pas** ouvrir un document joint.
 / 添付書類が開**ケナイ**んだ。
 (NHK2003 年 9 月:39 を一部修正)

の「開**ケナイ**」は「開け方を知らない(開け方がわからない)」と同義である。これに対し、

- (49)’ Je **ne peux pas** ouvrir un document joint.
 / 添付書類が開**ケナイ**んだ。
 (同上:30-31、39)

は「開け方は知っているが、何かの事情で開けることができない」を表わし、原典では「(開けるのに必要な)特殊なソフトがないので開けられない」という設定である。“pouvoir”との対比において、“savoir”の「知っている」という語彙的意味が一層鮮明となっているのが、以下の表現例であろう。

- (50) Je **ne sais pas** chanter “Plaisir d’amour”.
 Je ne connais pas l’air.
 (私は「プレジール・ダムール(愛の喜び)」を歌えない。メロディーを知らないの。)
 (21 世紀:750)
 (50)’ Je **ne peux pas** chanter “Plaisir d’amour”.
 J’ai une laryngite.
 (私は「プレジール・ダムール(愛の喜び)」を歌えない。咽喉炎にかかっているの。)
 (同上)

「メロディーを知らない」は「歌い方を知らない」と同義であり、(50)は主体に能力が備わっていないこと、すなわち主体の側に属する要因によってできないことを述べているのに対し、(50)’は、「メロディーを知っていて普段は歌えるが発話時には咽喉炎で歌えない」こと、すなわち主体とは切り離れた外的要因によって歌える状況にないことを述べている²²⁾。“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”の間にはこのような相違が存在するため、

- (51) Émilie **ne sait pas** mentir.
 (エミリーは嘘はつかないよ。)
 (21 世紀:749)

(51)' Émilie **ne peut pas** mentir.

(エミリーは嘘はつけないよ。)(同上)

を比較した場合、(51)は「嘘をつかない」という“Émilie”の性格、すなわち属性を述べた表現となるのに対し、(51)'は“Émilie”が嘘をつける状況にないことを述べた表現となる²³⁾。(51)のような“savoir+不定詞”表現が属性を述べる場合に用いられることは、小熊 2013:79 が、“savoir+不定詞”の表わす能力は「広い意味での人間的資質」も表わすとしていることと符合する。ちなみに、寺村 1982:269 を参考とした勝川 2011 a:106、同 2011 b:167 は、“会V”が表わす能力はその主体の「属性(性質・特徴)」をとらえることが可能であるとしており、この点においても“savoir+不定詞”表現との共通点がみられることとなる((21)、(22)は属性について述べた典型的なケースということができ

る)。
“savoir+不定詞”は主体の属性を表わすことが可能な形式であるため、例えば

(23) Il **sait** se tirer d'affaire.

(24) Il **sait** parler aux enfants.

(52) C'est un homme qui **sait** vivre.

(彼は世故にたけた男だ。)

(『フランス文法大全』:316)

のような「熟達している」ことを表わす表現にしばしば用いられる²⁴⁾。

“savoir+不定詞”は主体の側に属する要因によってできることを表わす形式であり、“savoir”が「知っている」という語彙的意味をとどめていることから、語気緩和(婉曲な否定)のために否定形条件法で用いられる場合を除けば、主体は有情物に限定される²⁵⁾。これに対し“pouvoir+不定詞”は、主体とは切り離された外的要因を問題とする形式であるため、有情物について述べる表現のほか、

(53) Ce briquet **peut** encore servir.

(このライターはまだ使える。)

(『ロワイヤル仏和中辞典』“pouvoir”の項)

(54) La salle **ne peut (pas)** contenir tout le monde.

(会場には全員を収容しきれない。)

(『クラウン仏和中辞典』“pouvoir”の項)

のような無情物について述べる表現にも用いられ、“savoir+不定詞”のように「熟達している」を表わす働きをすることもない。また、推測・推量を表わす場合にも、(43)、(44)のような無情物について述べる表現や、

(55) Il **peut** y avoir une manifestation dans ce quartier.

(この界限ではデモがあるかもしれない。)

(『ディコ仏和辞典』“pouvoir”の項)

(56) Évidemment, il **peut** y avoir d'autres solutions que celle-ci.

(もちろんこれ以外の手立てもあるかもしれない。)(六鹿 2016:250)

のようないわゆる非人称構文に用いられる。

(次号に続く)

注

- 1) 大河内 1997:137 には、“savoir+不定詞”、“会V”をはじめとする異なる言語の可能形式の間に相似点が存在する旨の記述がみられる。《法汉词典(“savoir”の項)》、《新简明法汉词典(“savoir”の項)》は“savoir”の第一義として“知道”、“晓得”と示し、前者は第二義として“记住”、“记牢”と示している。
- 2) 勝川 2011 a:104-105 は、後者を“会”のプロトタイプとする従来の教育に対する疑問を呈し、両者を「会得」という一つの枠におさめている。呂雷寧 2006:54 は“会V”が表わす能力可能について、「能力には本来備わった能力と修得した能力があるが、いずれもその実現が動作・状態の担い手の意志によって制御できる」としている。太田 1958:195-196 には“會”の意味・用法の歴史的変遷についての記述がみられる。
- 3) 『ディコ仏和辞典(“savoir”の項)』、『ロワイヤル仏和中辞典(“savoir”の項)』は“savoir+名詞”の項目をもうけて(25)のような表現例を示している。英語にも“She knows French. (彼女はフランス語を知っている[ができる])”(『新英和中辞典』“know”の項)のような表現がみられる。
- 4) “avoir”、“être”はいわゆる「複合時称(temps composé)」や受動態を構成する機能語として働く。この点については島岡 1999:521-522、川本 2007:53 などを参照。「助動詞」、「副次的助動詞」、「準助動詞(or 半助動詞)」、「助動詞的な働きをする動詞」などの呼称については『フランス語学小辞典(「助動詞」、「準助動詞」の項)』、『フランス文法大全』:315-316、佐藤 1992、石野 1997:173-174、島岡 1999:522、久松 1999:59、川本 2007:53-54、六鹿 2016:246-248 などを参照。
- 5) 久松 1999:43 は、“savoir”に対応する英語の成分として

“be able to”とともに“know”、“learn”のような動詞を挙げている。

- 6) 『プログレッシブ仏和辞典(“savoir”の項)』には、“savoir le français(フランス語ができる)”、“connaître très bien le français(フランス語を非常によく知っている)”という例がみられる。同書にはさらに、“savoir”の後には「知識、情報」など知的に知っている対象が、“connaître”の後には「事物、人物」など経験的に知っている対象がそれぞれ続くのが一般的である旨の記述がみられる。これらの点については、さらに小熊 2013:82-83, 85-86 を参照。久松 2011:237 は、“Tu **connais** Kyoto? (京都を知ってる?)”という問いは、知識としてその場所を知っているというニュアンスではなく、“Tu es déjà allé(e) à Kyoto? (京都に行ったことはある?)”の意味であるとしている。“savoir”、“connaître”、“comprendre”の使い分けについては、中国語における“会”、“懂”などの使い分けと比較して考察するのも有意義である。この点については、《新簡明法汉词典(“savoir”の項)》、France DHORNE 1986、相原 1997:40-41 などを参照。
- 7) 『ディコ仏和辞典(“pouvoir”の項)』には、“pouvoir”が不定詞をとらない場合として「[oui, non, quand, dès que, si, comme などの後で不定詞を省略して]できる」を表わすケース、「[不定代名詞・疑問代名詞を目的語にして]…できる」を表わすケースが挙げられている。ちなみに、佐藤 1992:96 には、“pouvoir”が可能性を表わす場合には不定詞が不可欠である旨の記述がみられる(可能性を表わす“pouvoir”の働きについては 1.2 で述べる)。
- 8) 助動詞とするものには《現代汉语八百词(“会”の項)》、興水 1985:164-168 などがある。一般の動詞との相違点としては興水 1985:164-165 に、①述詞性賓語のみとることができ、体詞性賓語はとれない、②重ね形がつかれない、③後置成分“了、着、过”などがつかない、が挙げられている。この点については、さらに『中国語教科書 上巻』:196、《实用现代汉语语法》:171-172、藤堂・相原 1985:120 などを参照(但し、藤堂・相原は「認定助動詞」という呼称を用いている)。『岩波 中国語辞典(“会”の項)』は「副詞」としている。このような呼称の相違には、動詞と機能語のいずれに近いものと位置づけるかの相違が反映されている。助動詞と副詞の相違や接点については、興水 1985:165、荒川 1986:4、同 2003:177 を参照。
- 9) これに対し、王・一木・苞山編著 2006:128 には、“会说汉语”のような「ある言語を話すことができる」という表現の場合に限って“会汉语”のように動詞を省略することが可能である旨の記述がみられ、“会+名詞”について異なる見方がなされていることがうかがわれる。この点に関しては、さらに渡辺 1999:156 を参照。
- 10) この点に関しては、日本語可能表現について述べた金子 1980:70-72 を参照。(36)における“一定会生气的”と“きっとおこるよ”のような“会V”と日本語動詞との対応関係が成立する点については、郭春貴 2017:33、42、43、45、47-48 を参照。
- 11) 同書は、“may”、“must”、“should”の原義用法としてそれぞれ「～してもよい」、「～ねばならない」、「～すべきである」を、陳述緩和用法としてそれぞれ「～かもしれない」、

- 「～に違いない」、「～はずである」を挙げている。「陳述緩和用法」は、讃井 1996:56-58 における「談話指向用法」に相当する。ちなみに、『研究社 日本語教育事典(“モダリティ”の項)』には、表現される事態に対する心的態度を表わす「対事的モダリティ」を表わす形式として、義務(obligation)や当為を表わす「義務モダリティ(deontic modality/root modality)」形式、可能性(possibility)や蓋然性(probability)を表わす「認識モダリティ(epistemic modality)」形式が示されている。
- 12) “possible”は形容詞であり“il est [C'est] possible de +不定詞/que+接続法”形式で用いられるため、本稿ではとり上げない。
 - 13) 『日本語教育事典(「推量の表現」、「だろう(でしょう)」、「はずだ(はずです)」、「『に違いない』と『はずだ』の項)』は、「～**ダロウ**」の働きについて「話し手の単なる推量・想像を表す」、「種々の情報や周囲の状況などに基づいて、ある事柄を事実だと認め得る可能性があるという判断を表す。この判断の対象としては、断定することのできない事柄がすべて含まれ、また、判断のよりどころとなる事柄は単なる想像にすぎないものであってもかまわない」とし、「～**カモ知レナイ**」の働きについて『「多分そうだろうがよく分からない」の意で、はっきりそうと断定できず、半分疑いをもっている意を表す」とする一方、「～**ハズダ**」については「ある事柄の実現を当然のこととして予測したり期待したりすることを表す。何らかのよりどころを得てそうとらえる場合と、既定の事実として予測されている事柄を表す場合とがある」、「『～に違いない』は推量を示す表現で、話し手が言おうとしている事柄に関して、絶対の確信を持っているということを強調する時に用いられる」、「『～はずだ』は『～に違いない』のような、話し手の勝手な推量だけでなく、当然そうあるべきことを予想していて、また、そのように予想できるだけの理由、根拠を話し手が持っている場合に使われる」、「客観的根拠に基づいた判断であるという気持ちを表している『～はずだ』に対して、『～に違いない』は話し手中心の主観的な判断、確信で、それを強調しようとする気持ちを表している」としている。これらの点については、さらに仁田 1981:96-99、森田 1989:595-596、950-953 を参照。
 - 14) 『フランス文法大全』:252 の“Le courrier **doit** être ici dans peu de jours. / 二三日中に使いがここへ来る**カモシレナイ**。”のように“devoir — カモシレナイ”の対応例もみられるものの、“devoir”は確実性の高い推測を表わすのに用いられるのが一般的である。六鹿 2016:251 は“devoir”の働きの一つとして「推測 — 確信」と示している。確実性の度合いにおける“pouvoir”、“devoir”の差異については、さらに石野 1997:174-180、同 2017:275-276、林 1998:45-48、目黒 2000:248-249、280-281 を参照。また、《实用现代汉语语法》:176 は“要”について、“表示‘可能’、‘会’的意思，但语气比‘可能’、‘会’更肯定。”とし、荒川 1986:5 は、コトガラに対する確信の度合いの強弱によって“也许<可能<会<得、要”のように示している。これらの成分の働きについては、さらに荒川 2003:195-201、203-204、『中国語虚詞類義語用例辞典(“可能 也许”、“能 会”、“要 须要”、“应该 应

当 应 該”の項』を参照。《法漢词典(“pouvoir”、“devoir”の項)》、《新簡明法漢词典(“pouvoir”、“devoir”の項)》における中国語助動詞との対応関係をみると、“pouvoir”、“devoir”はいずれも確実性の度合いにおいてかなりの幅があることがうかがわれる。ちなみに、確実性の度合いにおける両者の差異は、それぞれの原義と不可分の関係にある。この点については、佐藤 1992:95、石野 1997:174-175、177、同 2017:275-276、280 に関連する記述がみられるが、注 11 で紹介した「原義用法」、「陳述緩和用法」の問題と深く関わるものである。

- 15) 推測・推量を表わす働きにおける“会”、“能”の共通点・相違点については、さらに『中国語虚詞類義語用例辞典(“能 会”の項)』を参照。荒川 2003:198 は可能性を表わす“能”の働きについて、「可能の『道理から言ってできる』につながる」としている。“会”、“能”の選択に際して働く主たる要因については、渡辺 1999:152 を参照。
- 16) 「推測・推量」、「可能性」のほか、「蓋然性」という概念を用いて考察が行なわれることがある。この点については仁田 1981:99-101、相原 1991:33、同 1997:34-38、佐藤 1992:95 を参照。
- 17) この点については、さらに金子 1980:63 を参照。また、『日本語誤用辞典(「ことができる」の項)』は、「ことができる」が「可能形(買える、食べられる)」に比べてやや書き言葉的であるとしている。ちなみに、『日本語文型辞典(「うる」の項)』には、「うる」は「彼が失敗するなんてありえない。」などのように意志のない場合にも用いられる一方、能力を表わす場合には使えない旨の記述がみられる。「うる」については、さらに金子 1980:66-67 を参照。
- 18) 可能動詞およびその内部構造については坂梨 1969:37-43、森田 1989:1213、『日本語学キーワード事典(「動詞」の項)』、『日本語教育事典(「可能動詞」、「可能の表現」の項)』、『日本語文法事典(「可能」、「可能動詞」の項)』などを参照。渋谷 1993:6 には、「書くコトガデキル」は「書くコトヲスル」の可能形式であり、動詞部と可能部を別々に表示する分析的な形式である旨の記述がみられる。この点についてはさらに同:23 を参照。
- 19) 「ラ抜き言葉」については、さらに『日本語学キーワード事典(「可能表現」の項)』、『日本語教育事典(「れる・られる」の項)』などを参照。『日本語文法事典(「可能動詞」の項)』は「ラ抜き言葉」も可能動詞と呼んでよいとしているが、可能動詞にはなりきっていないとみる立場に立てば、非文法的な可能形式であるということとなる。ついですが、使役を表わす場合の「見セル」、「着セル」のような複他動詞も「見サセル」、「着サセル」のような使役形式からみれば「サ抜き言葉」のような観があるが、こちらの方は動詞と位置づけられている。
- 20) “savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”の働きについては、目黒 2000:250、佐藤・山田 2011:80、久松 2011:220、『クラウン仏和辞典(“pouvoir”の項)』、『ロワイヤル仏和中辞典(“pouvoir”の項)』、『新フランス文法事典(“savoir”の項)』などを参照。「能力」という用語の使い方に注意が必要である点については、金子 1980:65 においても言及されている。
- 21) 小熊はそれぞれの例として“Luc **sait** nager.”、“Luc **peut**

nager(aujourd' hui).”を挙げている。「時間軸が想定される」という表現は「時空間限定を受ける」に改めた方がよいように思われる。ちなみに、勝川 2011 a :103、同 2011 b :165 は日本語における「可能」についての森田 1989:1214-1215 の記述について、可能表現について考える際には「能力がある」と「実際にその能力を発現・実行できる」を分けて考えるべきであることを示唆しているとし、その意義を認めている。勝川 2011 a :106 はさらに、中国語の“会”が主体の意志や外的条件に依存することなく、コトガラが自然に成り立つことを表わす点に着目する一方、“会”を用いた可能表現が恒常的、非特定時間内に反復可能な能力所有を表わすとしている。

- 22) (50)' は、「V(ラ)レル」の働きについて述べた森田 1989:1215 にいう「内的条件として、心理的または肉体的にそれをなすことが可能である」ケースに相当する。
- 23) この点については、「知っているが言えない」ことを表わす“Je **ne peux pas** vous dévoiler ce secret.(この秘密をあなたに打ち明けることはできない。)(21 世紀:750)”、“Je **ne peux pas** vous dire la vérité.(あなたに真実をお話しすることはできません。)(『改訂版 フランス語ハンドブック』:44)”のような表現例をみれば理解しやすい。「属性」については『日本語文法事典(「形容詞」の項)』を参照。『言語科学の百科事典(「地域言語の自然性」の項)』、呂雷寧 2006:56-58、周国龍 2012:10-13 には「属性可能」についての記述がみられるが、この概念は無情物に備わった本来の性質について述べるものであり、本稿ではあつかわない。
- 24) “savoir vivre”は「世故にたけている」を意味するのに対し、“pouvoir vivre”は“Quand je pense qu' avec de l' argent on **pourrait vivre** mieux ! (お金があればもっと良い生活ができるのに。)(『会話作文 フランス語表現辞典』「できる」の項)”のように「生活できる」という文字通りの意味を表わす。
- 25) 『フランス文法事典(“savoir”の項)』には「主語は人物名詞」と示されている。

参考文献

- 愛知大学中日大辞典編集部編『中日大辞典(増訂第二版)』、大修館書店(1987)。
- 相原茂 1991。「能・会・可以」、『中国語』1991 年 1 月号、内山書店、30-33 頁。
- 相原茂 1997。『謎解き中国語文法』、講談社現代新書。
- 朝倉季雄『フランス文法事典』、白水社(1955)。
- 朝倉季雄『新フランス文法事典』、白水社(2002)。
- 天羽均・大槻鉄男・木内良行・佐々木康之・多田道太郎・西川長夫・山田稔・Jean Henri Lamare 編『クラウン仏和辞典』、三省堂(7 版 2015)。
- 荒川清秀 1986。「文における主体的な要素 — 能願動詞」、『中国語』1986 年 3 月号、大修館書店、4-6 頁。
- 荒川清秀 2003。『一歩すすんだ中国語文法』、大修館書店。

- 石野好一 1997.『フランス語の意味とニュアンス 基礎から身につく表現力』, 第三書房(7版2009)。
- 石野好一 2017.「確信度の表現に関する日仏語対照研究」, 青木三郎編『フランス語学の最前線 5』, ひつじ書房, 269-308 頁。
- 市川保子編著『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』, スリーエーネットワーク(2010)。
- 岩淵匡 1972.「受身・可能・自発・使役・尊敬の助動詞」, 『品詞別日本文法講座 8 助動詞Ⅱ』, 明治書院, 133-166 頁。
- 『NHK ラジオ フランス語講座』2003 年 7/9 月号, 日本放送出版協会。(略称 NHK)
- 王占華・一木達彦・苞山武義編著 2006.『中国語概論[改訂版]』, 駿河台出版社。
- 大賀正喜ほか編『プログレッシブ仏和辞典』, 小学館(2版2008)。
- 大河内康憲 1997.『中国語の諸相』, 白帝社。
- 太田辰夫 1958.『中国語歴史文法』, 朋友書店(新装再版2013)。
- 小熊和郎 2013.「動詞 savoir とその周辺」, 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語をとらえる フランス語学の諸問題Ⅳ』, 三修社, 76-92 頁。
- 郭春貴 2001.『誤用から学ぶ中国語 — 基礎から応用まで —』, 白帝社。
- 郭春貴 2017.『誤用から学ぶ中国語 続編 2』, 白帝社。
- 勝川裕子 2011a.「可能の助動詞“会”の表現機能と『上手い』への派生について」, 『中国語教育』第 9 号, 中国語教育学会, 101-114 頁。
- 勝川裕子 2011b.「可能の助動詞“会”の属性描写機能」, 『日中言語対照研究論集』第 13 号, 日中対照言語学会(白帝社), 163-177 頁。
- 金子尚一 1980.「可能表現の形式と意味(I) — “ちからの可能”と“認識の可能”について —」, 『共立女子短期大学紀要(文科)』第 23 号, 62-76 頁。
- 川本茂雄編 2007.『フランス語統辞法(新装版)』, 白水社。
- 木村哲也 2016.『フランス語作文の方法(表現編)』, 第三書房。
- 倉石武四郎『岩波 中国語辞典 簡体字版』, 岩波書店(1990)。
- 倉石武四郎・折敷瀬興編『岩波 日中辞典』, 岩波書店(1983)。
- グループ・ジャマシイ編著『日本語文型辞典』, くろしお出版(1998)。
- グループ・ジャマシイ編著《中文版 日本語句型辞典(『日本語文型辞典』中国語訳(簡体字版))》, くろしお出版(2001)。
- Claude ROBERGE・Solange 内藤・Fabienne GUILLEMIN・加藤雅郁・小林正巳・中村典子『21 世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356 項目 —』, 駿河台出版社(2版2004)。(略称 21 世紀)
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆編集『日本語学キーワード事典』, 朝倉書店(1997)。
- 小稲義男・山川喜久男・竹林滋・吉川道夫編『新英和中辞典』, 研究社(5版1985)。
- 奥水優 1985.『中国語の語法の話 — 中国語文法概論』, 光生館。
- 近藤安月子・小森和子編『研究社 日本語教育事典』, 研究社(2012)。
- 坂梨隆三 1969.「いわゆる可能動詞の成立について」, 『國語と國文學』昭和四十四年十一月号, 東京大学国語国文学会, 34-46 頁。
- 佐藤淳一 1992.「フランス語の不定詞構文と準助動詞について」, 『筑波大学フランス語フランス文学論集』第 7 号, 筑波大学フランス語フランス文学研究会, 87-104 頁。
- 佐藤康・山田敏弘 2011.『日本語から考える フランス語の表現』, 白水社。
- 讃井唯允 1996.「助動詞(能, 会, 可以)」, 『中国語』1996 年 10 月号, 内山書店, 56-59 頁。
- 渋谷勝己 1993.「日本語可能表現の諸相と発展」, 『大阪大学文学部紀要』第 33 巻第 1 分冊, 1-260 頁。
- 島岡茂 1999.『フランス語統辞論』, 大学書林。
- 島田昌治/林田遼右/ティエリー・トルード編集『会話作文 フランス語表現辞典』, 朝日出版社(1985)。
- 周国龍 2012.「何故日本語は曖昧だと思われるのか(4) — 可能表現に関する日中対照の視点から —」, 『鈴鹿国際大学紀要』CAMPANA No. 19, 9-19 頁。
- 鈴木孝明 2015.『日本語文法ファイル 日本語学と言語学からのアプローチ』, くろしお出版。
- 鈴木良次編『言語科学の百科事典』, 丸善株式会社(2006)。
- 高橋弥守彦・姜林森・金満生・朱春躍編著『中国語虚詞類義語用例辞典』, 白帝社(1995)。
- 田辺貞之助『フランス文法大全』, 白水社(2007)。
- 田村毅・倉方秀憲・恒川邦夫・吉田城・春木仁孝・牛場暁夫・東郷雄二・石井洋二郎・支倉崇晴編『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社(2版2005)。
- 中條屋進・丸山義博・G. メランベルジェ・吉川一義編集『デイク仏和辞典』, 白水社(2003)。
- 張黎・佐藤晴彦・内田慶市 1997.『中国語表現のポイント 99』, 好文出版。
- 寺村秀夫 1982.『日本語のシンタクスと意味 第 I 巻』, くろしお出版。
- 『東京外国語大学言語モジュール フランス語 文法モジュール』(<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/fr/>)
- 藤堂明保・相原茂 1985.『新訂 中国語概論』, 大修館書店。
- 成戸浩嗣 2016.「日中対照研究方法論(2) — “給・N+V”

- 表現とそれに対応する日本語使役表現、受益表現(上) —」, 『現代マネジメント学部紀要』第4巻第2号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 27-40 頁。
- 成戸浩嗣 2018 a. 「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(上)」, 『現代マネジメント学部紀要』第6巻第2号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 29-49 頁。
- 成戸浩嗣 2018 b. 「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(下)」, 『愛知学泉大学紀要』第1巻第1号, 愛知学泉大学, 63-82 頁。
- 新倉俊一・朝比奈誼・稲生永・井村順一・富永明夫・宮原信・山本顕一著『改訂版 フランス語ハンドブック』, 白水社 (1996)。
- 西村牧夫・鳥居正文・中井珠子・飯田良子・曾我祐典・菊地歌子・井元秀剛・増田一夫編訳『ロベール・クレ仏和辞典』, 駿河台出版社 (2011)。
- 仁田義雄 1981. 「可能性・蓋然性を表わす擬似ムード」, 『國語と國文學』昭和五十六年五月特集号, 88-102 頁。
- 日本語教育学会編『日本語教育事典(縮刷版)』, 大修館書店 (1987)。
- 日本語文法学会編『日本語文法事典』, 大修館書店 (2014)。
- 林迪義 1998. 「POUVOIR のモダリティについて」, 『フランス語を考える フランス語学の諸問題Ⅱ』, 東京外国語大学グループ《セメイオン》, 三修社, 45-57 頁。
- 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也編著／安西記世子・小倉博行・酒井智宏著『フランス語学小辞典』, 駿河台出版社 (2011)。
- 久松健一 1999. 『英語がわかればフランス語はできる!』, 駿河台出版社。
- 久松健一 2002. 『英仏日 CD 付 これは似ている! 英仏基本構文 100+95』, 駿河台出版社。
- 久松健一 2011. 『ケータイ [万能] フランス語文法 実践講義ノート』, 駿河台出版社。
- 船田秀佳 2003. 『英語がわかれば中国語はできる』, 駿河台出版社。
- France DHORNE 1986. 「『知る』, 『分かる』と『savoir』, 『connaître』 — 対照言語学的一考察 —」, 『日仏語の基本語彙の対照言語学的研究論集』, 国立国語研究所, 85-92 頁。
- 北京語言学院編『中国語教科書 上巻』, 光生館 (1960)。
- 目黒士門 2000. 『現代フランス広文典』, 白水社。
- 森田良行 1989. 『基礎日本語辞典』, 角川学芸出版 (10 版 2005)。
- 呂叔湘主編／牛島徳次・菱沼透監訳『中国語文法用例辞典 — 《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』, 東方書店 (改訂版 2003)。
- 呂雷寧 2006. 「使用範囲から見た日中両言語の可能表現」, 『ことばの科学』第19号, 名古屋大学言語文化研究会, 53-66 頁。
- 六鹿豊 2016. 『これならわかる フランス語文法 入門から上級まで』, NHK 出版。
- 渡辺麗玲 1999. 「助動詞 “能” 与 “会” の句法语义分析 — 以表示能力与可能性为中心 —」, 『現代中国語研究論集』, 中国書店。
- 《法汉词典》, 上海译文出版社 (1979)。
- 广州外国语学院法语专业《新简明法汉词典》, 商务印书馆 (1983)。
- 吉林大学汉日词典编辑部《漢日辞典》, 吉林人民出版社 (1982)。
- 刘月华・潘文娛・故諱《实用现代汉语语法(增订本)》, 商务印书馆 (2001)。
- 吕叔湘主編《现代汉语八百词(增订本)》, 商务印书馆 (1999)。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室《现代汉语词典》, 商务印书馆 (5 版 2005)。

(原稿受理年月日 2018 年 12 月 5 日)